



Title	雑体書の書体意匠の特色について：『篆隸文体』を例に
Author(s)	全, 容範
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雑体書の書体意匠の特色について — 『篆隸文体』を例に —

全 容 範

京都工芸繊維大学

キーワード

漢字, 意匠文字, 絵

Chinese Character, Calligraphy, Picture

はじめに

1. 『篆隸文体』とは何か
2. 3種類の記号的性向の雑体書について
3. 3種類の絵画的性向の雑体書について
4. 『篆隸文体』の雑体書の主な意匠の特色
おわりに

はじめに

私はこれまで「文字意匠」について勉強してきた。特に韓国の李朝時代の「孝悌図」〈図1〉と日本の平安時代の「葦手絵」〈図2〉との文字意匠を比較してきた¹⁾。「孝悌図」とは、李朝時代(15世紀頃)に、漢字の「孝」、「悌」、「忠」、「信」、「礼」、「義」、「廉」、「恥」の8つの文字を絵画的な意匠に仕立て、人々に儒教の倫理を教えるために作られたものである。一方、葦手絵とは、平安時代(10世紀)、平仮名を変容させ、葦、流水、水鳥などに見立てた文字(葦手)を絵の中に組み合わせたものをいい、それは『平家納経』の「薬王品」見返絵、様々な色紙、さらには蒔絵や衣服の文様として、また、判じ絵や仏事の供養物のしるしとして、用いられたものである。葦手

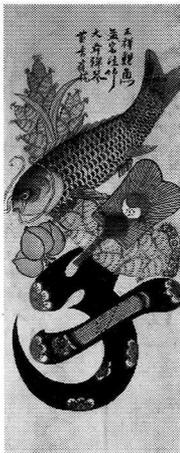


図1 孝悌図・孝

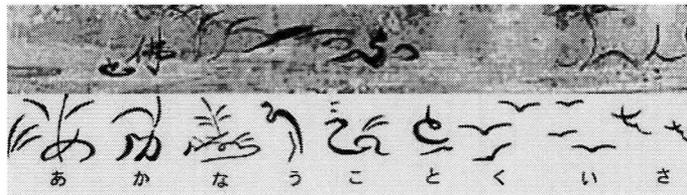


図2 葦手絵・平家納経と葦手絵のいろは

絵の機能は、佐野みどりのいうように、貴族の和歌の世界において、吉祥性から遊戯性を重んじるなかで変化していったと考えることも出来る²⁾。

この二つの文字意匠は、異なった国、時代と異なった製作動機によって作られたものであるが、文字と図柄との融合、或いは文字を図柄へ変容しようとしたものである点では共通している。私は「孝悌図」と「葦手絵」の文字意匠の特色を明らかにするため、文字と具象的な形象、或いは絵柄との関係に注目し、①文字が絵画的な形式へと転換したもの、②文字の要素と絵画の要素が結合し、新たな様式を作り出したもの、そして③文字そのものがひとつの文様や象徴として成立したもの、という三つ類型に分類し考察した。その結果、漢字や平仮名そのものより、また絵や図柄だけより、「孝悌図」や「葦手」は、一層豊かな造形性と伝達性を合わせて持っているものということが出来た。

しかし、これら韓国や日本の文字意匠、或いはハングルや仮名文字の意匠の起源としての漢字意匠にはどのようなものがあったのか。このような問いを持つようになり、私は中国に起源を持つ「雑体書」なるものに注目するようになった。

そもそも漢字は、その発祥地である中国において、またその影響を受けた韓国や日本において不可欠な文字言語である。これまでその漢字の研究において、書の芸術の視点から書体の歴史的研究、および作者の研究はなされてきた。しかし今回取り上げる「雑体書」といった書体について、少なくともその造形や、意匠の側面の研究はほとんどなされてこなかったように思われる。この理由は、主に少ない資料の断片的な性格のためであると思われる。しかしその研究は、漢字意匠の様々な形式の原点たるものを明らかにするだけではなく、今日のタイポフェイスにおける漢字の造形が持つ今日的意義を問う試みとしても意義を持っていると思われる。

「雑体書」とは何か。それは書芸術としての書とは異なり、碑〈図3〉符籀（お札）〈図4〉、符節〈図5〉、印〈図6〉などに用いられた書の形を総称したものである。王羲之³⁾や歐陽詢⁴⁾といった書家が、詩文などに用いた、個性を表現する芸術としての書ではなく、むしろ日常生活で実用的な目的に応じた用途の書で、しかもそれは多かれ少なかれ通常の書体を変容したり、装飾性を添えたりした書であるといえる。別のいい方をすれば、書の歴史において、主流を成す篆書、隸書、楷書、行書、草書といった書体と関連するが、それとは異なった造形的な特色を持つのが雑体書である。

「雑体書」の歴史的展開は、「雑体書」に表された象形的な表現や、書の形態から考えれば、古代の漢字の影響を受けつつ、それが多様な書体として現れ始めたのは、春秋戦国時代（前770～前221）であり、六朝時代（222～589）にその最盛期を迎えたといえる。

六朝時代の書論書である、梁（502～557）の庾元威が著した『論書⁵⁾』には、「齊末の王融は、古今雑体を図した。それには六十四種の書体があった。」（齊末王融，圖古今雜體。有六十



図3 碑・則天武后の昇仙太子碑



図4 符籙・病魔除け用

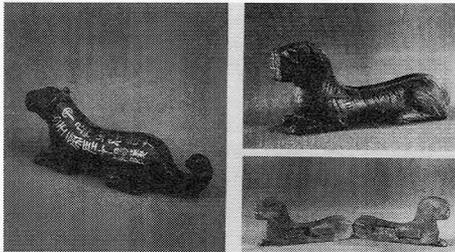


図5 符籙・秦の虎符

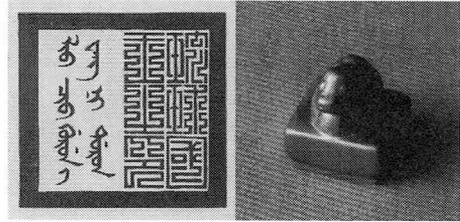


図6 印・琉球国王印

四書。)と記されている。この記事は六朝時代には「雑体書」が盛んに作られ、その言葉も通行していたことを物語っている。そしてその時代は「雑体書」の重要な資料書である『篆隸文體』が作られた時期でもある。即ち書が純粹に鑑賞の対象として、人間の精神の表現の媒体として自覚されるようになったという、書の造形性が注目される時期にその書物が製作されたのである。

「雑体書」という語は今日では一般的に二つの意味で解釈される。その一つは、「雲書、鳥書、人書、花書などの書体を指す⁶⁾」と言われている。これは雲や、人や花といった物象を用いて、漢字の字画や構造を象る書体をいうのである。

「雑体書」のもう一つの意味は、「行書、草書、楷書などの書体の特徴を兼ね備えている書体⁷⁾」という。この説明は、「雑体書」とは複数の漢字の書き方から成る書の形であることを示している。

私は以上述べた二つの意味から「雑体書」という書体とは、文字に図柄を導入することで、通常の文字より優れたイメージ的なものを伝えることを試みたもの、そして伝統的な運筆の仕



図7 鳥毛篆書屏風・正倉院蔵



図8 空海・十如是

方から由来するさまざまな書体や、その運筆の方法を調和させ、改めて文字の造形性を強めた書体であると考えたい。

さて「雑体書」の資料にはどのようなものがあったのか。その具体的な資料を挙げると、『篆隸文体』（5世紀・肉筆）、『夢英十八書』（964・石刻）、『明刻三十二篆刻金剛經』（1368～1662・木版）、『篆大学』（1661・木版）、『乾隆御製三十二体』（1747・木版）、『篆千字』（1838・木版）などを取り上げることが出来よう。そして日本に現存している「雑体書」の遺品としては、8世紀の「鳥毛篆書屏風」（正倉院蔵）〈図7〉や10世紀平安時代の空海の「十如是」〈図8〉などがあり、奈良時代にすでに各種の雑体書が通用していたことが推測される。

小論では上に挙げた「雑体書」の資料なかで、特に『篆隸文体』と呼ばれている雑体書を収集した書物を注目したい。まず『篆隸文体』の特色と意義を明らかにする。次にその書物から、記号的性向の雑体書と絵画的性向の雑体書を3つずつ選び、その書体について書かれた記事を要約するとともに、その雑体書の意匠の特色を語る。そしてこれらの意匠性から、今日のデザインに活用出来る可能性を考えてみる。

1. 『篆隸文体』とは何か

『篆隸文体』は、南斉（479～494）の武帝（482～493）の次男である、蕭子良⁸⁾（460～485）が著した、雑体書と総称される過去の独特の書体を集めた資料集である。『篆隸文体』に集められた雑書体は、紀元前3000年頃に起源を置くものから490年頃の南斉の時代までのもの、即ち中国の上古時代に伏羲⁹⁾が見たという龍をモチーフとした龍書や、漢字の創始者とされる倉頡¹⁰⁾が作ったとされる古文篆から、南斉の武帝の時、花が綴られた様子を象ったという瑞花

書まで49種である。

日本に現存する『篆隸文体』は、空海が唐から帰朝したとき（806年）、持ち帰ったと言われる。『性霊集¹¹⁾』第4巻に「梵字并に雜文を獻ずる表」という表文があり、その末尾には空海が朝廷に奉納した7つの文献が挙げられている。その一つが『古今篆隸文体一卷』と題され、「弘仁五年閏七月廿八日」という日付と、「沙門空海進」という語が記されている。ここでの『古今篆隸文体』というのが『篆隸文体』に他ならない¹²⁾。

『篆隸文体』は、「序」と「雜体書の記事とその書体の例」といった、二つの部分で構成されている。

「序」においては、まず、執筆の目的として、古代の文字の散逸を嘆き、大衆に多様な漢字の書体を伝えることや、後学者の文習の用をなすに足りることの願いが書かれている。また文字の始まりは、文字の創始者とされる倉頡以前の、伏羲の易の八卦¹³⁾にあるといい、漢字が長い歴史を担っていることが書かれている。その他、この書物の書体の収集の経緯として、王室の書庫や民家の書架を尋ねたことや、あらゆる文献を探ったことが、また製作過程については、収集した書体の欠けた箇所を直し、四字成語で書体の例を表したことなどが書かれている。

「雜体書の記事とその書体の例」は、
〈図9〉のように編集されている。即ち書体ごとに、左にその書体の説明文と、右にその書体の例が四字成語で大きく表されている。（例の〈図面9〉は、左から右の順で虎書の説明文、虎書の四字成語、蛇書の説明文、蛇書の四字成語からなる。）



図9 雜体書の記事とその書体の例

雜体書の例として表された四字成語は、雜体書の記事や意匠などを説明した内容で、各々の雜体書の下端部には楷書の漢字が添えられ、雜体書の書体の漢字が何に相当するのかを見る側に示している。これらの書体を『篆隸文体』では、「篆」、「書」という接尾語をつけているが、古典的な書体を簡略化したり、装飾を加えたりした意匠文字である。

いずれにせよ多様な書体を忘却せず、散逸させないで、受け継いでいこうとする『篆隸文体』の雜体書は、漢字の造形のさまざまな形式を収録しているので、漢字やその意匠の研究にとって重要な資料である。

2. 3種類の記号的性向の雜体書について

『篆隸文体』は、49種の雜体書を掲載している。私はこの中から、記号的性向と絵画的性

向の典型的なものを3種類ずつ選び、その記事を略述し、意匠的特色について述べたい。この二つの性向の雑体書を考察することは、文字と絵というモチーフが雑体書の意匠では、どのように関わり合って視覚化されるかを知ることができ、『篆隸文体』の雑体書の意匠的特色を明らかにすることになるだろう。

記号的性向の3種類の雑体書として、1、籀文(大篆)、2、小篆書(小篆)、3、刻符書を選ぶ。

1、籀書<図10>:周(前1100頃~前256)の宣王(前828~前782)の臣下である史籀が、古文に基づいて作った書体で、作った人の名前「籀」をとってその書体の名をつけた。この書体は当時学童に漢字を教える『大篆十五篇』を書いたものである。現在には書道の分野で用いられる書体が、当時には学習用教材を書く実用の書体であったことが分かる。

この書体の四字成語の「籀・文・中・達」のなかの、「籀・中」は篆書の字画を垂直と水平に構成していて、特に「籀」の右部には同じ形態素¹⁴⁾が上下に繰り返されている。「文・達」はその字の画に装飾的な露鋒¹⁵⁾と方筆¹⁶⁾が併用されている。そしてこの四字成語の前者の2つの字は動的で、後者の2つの字は静的であることから、対照的な文字の配置が注目される。

2、小篆書<図11>:秦の丞相の李斯が、古文や史籀が作った書体を簡易にして作った書体である。始皇帝が中国を統一した後、全国を巡回する際、之罘山(山東省福山区の東北)や會稽山(中国浙江省紹興市の南東)に登って頌徳碑を建て、その碑文を李斯が作った小篆で書いたという。即ちこの記事には小篆書は碑文を刻むことに用いられたということが示されている。

この書体の例としては、複数の異なった用筆で書かれた装飾的な篆書の「龔・龔・乾・法」が用いられている。このなかの「龔」は上部に「龍」と、その下部に「口」と「共」で構成され、神や天子を象徴する「龍」の前で供え物を捧げることを表しているようである。こういうところは「龔」も同傾向のものであるが、その字からは「龔」の下



図10 籀書



図11 小篆書



図12 刻符書

部の「衣」が左右対称の装飾的な字形になっている。「乾・法」で際立つのはその字の右部に見られる、鳥が連想される形である。このような鳥の形は他の雑体書にもしばしば表れるもので、肉筆の筆跡から生じた形であると思われる。

3, 刻符書〈図12〉：始皇帝が天下を統一した際、皇帝の命が永らえることを願い、当時の丞相の李斯などの臣下が玉璽を作らせたという。これによって刻符書が成り立ち、印を刻む最も有名な書体として後世に伝えられ、割符などにも用いられることになった。

刻符書の例として「皇・帝・壽・昌」の四字成語が書かれている。この刻符書を表した意匠のことを「鳥頭雲脚」といい、「鳥の頭」の模様と「龍の爪」（雲脚）の模様を用いて字形を象ることをいう。「皇」は上・下部、「帝・壽・昌」は上部に「鳥の頭」が描かれて視覚的に際立っている。また「龍の爪」は各々の字の画の細部を装飾的に表している。ここでの刻符書は他の書体と異なって、黒い線で縁とりした白い画で字形を表したので、軽い感じを与える。

以上の3種の記号的性向の雑体書は、一般的な書体と異なった特色をもつ画で仕立てられたことが明らかになった。通常の画を変形した垂直と水平の画が用いられている、一つの画の起筆と収筆の箇所に露鋒や方筆、或いは画に文様の形が用いられたことなどである。またこのような画で作られた文字は、同一の形態素を反復したり、四字成語の構成において静的な文字と動的な文字を配したり、或いは文様の形で字義の表現を高めたりして、書体の視覚的特色を豊かにしている。

3. 3種類の絵画的性向の雑体書について

『篆隸文体』には他の雑体書の文献では見られない27種の「象形書」がある。そのなかから絵画的な性向の強い3種類の雑体書、1, 科斗書、2, 仙人書、3, 虎書を選ぶ。

1, 科斗書〈図13〉：これはおたまじゃくしが「科・斗・浮・游」のそれぞれの楷書の字形を象っているのである。

その「科」の「禾」は5匹から、「斗」は4匹からなる。次の「斗」も4匹からなる。これは「科」の「斗」とほぼ同様であるが、その字の4画に当たるおたまじゃくしが下向きになっている。「浮」の「氵」は3匹から、「孚」は8匹からなる。10画で作る「浮」が11匹からなるのは、「子」の一画が2匹から成り立っているからである。「游」の「氵」は3匹から、「旡」は10匹からできている。ここでも「旡」の「子」の一画が2匹から成り立っているため、12画で作る「游」は13匹からなる。

おたまじゃくしの向き、即ち頭が起筆、尻尾が収筆に当たることや、「浮」と「游」の「子」を2匹が象ることは、肉筆の筆勢を重要視したからだと思われる。何よりもここではおたまじゃ

くしの泳ぐ様子が自然に表されていることが特徴的である。

2, 仙人書〈図14〉：黄帝¹⁷⁾の孫の帝嚳¹⁸⁾が、仙人の形をした書体で書物を表したり、祭礼用の服の装飾の文様を表したりしたことによって、仙人書が始まったといわれる。

仙人書には「上・仙・永・古」の四字成語が用いられている。仙人書の「上」は仙人が右を向いて座り、左の腕を上げ、あるものを指すような姿勢をとることで、「上」を象っている。仙人書の「仙」はその字の形態素である「イ」と「山」を、左側の両腕を上向きして立っている仙人と、右側の膝を地につけて座った、左向きの仙人が象っている。仙人書の「永」は、正面向き

の立っている仙人が両腕を外側へ曲げることで、「永」を象り、仙人書の「古」は、両腕を左・右へ伸ばした仙人の体と、膝を内側へ曲げた足とが「古」を象っている。

即ち仙人の体の姿勢、足や腕の形や向きなどを組み合わせて、楷書の字形を表したのが仙人書である。ここで表された仙人書の仙人の形は比較的簡単な字形を象っているが、その字形によく適している。

3, 虎書〈図15〉：この書は周の文王¹⁹⁾の時、瑞獣とされる虎の「騶虞²⁰⁾」をモチーフにして作られた書体である。

虎書には「虎・長・山・丘」の四字成語が用いられている。虎書の「虎」は2匹の虎からなる。即ち上部の左向きの虎が「虍」を、下部の右向きの虎が「几」を象っている。虎書の「長」は左を向いて立った虎がその字形を象っている。虎書の「山」は正面向きの座った虎が象っている。そして虎書の「丘」は、右向きの座像の虎が前の足で後の左の足を掴んだ様子で表されている。

4つの虎の向き、足、胴体、尻尾を組み合わせた様子が楷書の字形を象っているが、そのなかの「長」を象った虎の尻尾は、回転しつつ左下へ書かれている。それは「長」の7・8・9画を表したもので、草書書きの際、書かれる筆跡に似通っている。従って「長」の7・8・9



図13: 科斗書



図14: 仙人書



図15: 虎書

画は草書の筆跡を手本にしていると考えられる。また「丘」を象った虎やその足の様子からは、虎のあらゆる虎の様子を用いて、いかに字形に近づくことができるか、作者の苦心が窺える。

以上3種の絵画的性向の雑体書は、見る人の文字についての知識を必要とする。即ちこれは描かれた図柄と見る人が認識した文字が融合され、新たなイメージの文字情報を得ることが出来るものである。その図柄は肉筆の運筆に基づいて描かれているが、おたまじゃくしのようなモチーフによって容易に字形を表現できるものと、虎のように容易に字形を表せないモチーフを用いた場合とがある。後者の場合は、モチーフの全体の形を字形のイメージに合わせたり、或いは草書や楷書といった複数の書体で表したりしている。

4. 『篆隸文體』の雑体書の主な意匠の特色

前章で記号的性向の強い雑体書と、絵画的性向の強い雑体書について3種類ずつ取り上げ、その意匠について考察した。その過程のなかで把握出来た特色を次に要約する。

- ① 文字の本来の字画が垂直と水平に構成される特色をもつ。それは例えば籀書の「籀」, 「中」についていうことが出来る。
- ② 同一の形態素を繰り返すことで、字画の視覚的な密度を高めることが出来る。籀書の「籀」の右部に見られるものが示している。
- ③ 籀書の四字成語には静的傾向の字形と、動的傾向の字形とが組まれている。静的な「籀」、動的な「文」、静的な「中」、動的な「達」の順にすることは、四字成語そのものの形にコントラストを与え、視覚的なリズムを増すことになる。
- ④ 一つの画、或いは一つの字に複数の異なった用筆を用いることで、装飾的な字形が作られる。これも雑体書の大きい特色といえる。例えば籀書の「文」、「達」と、小篆書の「龔」, 「龔」, 「乾」, 「法」には露鋒と方筆という異なった用筆が見受けられる。
- ⑤ 本来の文字の一部の形を変容し、文字全体の造形性を強める特色が見受けられる。小篆書の「龔」はその字の下部の「衣」を、左右対称の形にすることで、その文字の造形性を高めている。
- ⑥ 刻符書は「鳥頭雲脚」という鳥の頭と龍の爪の2つの模様を、字形を象っている。それは模様そのものが誘い起こすものと、用いられた文字の字義が一つになった、特殊な雰囲気の造形性を生み出している。
- ⑦ 文字を象った象形書が一種の絵画を演じている。科斗書は字形を忠実に象っているが、おたまじゃくしの泳ぎを描いた絵にも見られる。このような科斗書から読み取れるイメージは、記号化された文字で書かれたものより豊富であろう。

- ⑧ 仙人書や虎書には、容易に字形を表せないモチーフがいかに文字として仕立てられるかということが試みられている。ここには人や動物を用いた文字造形の手本となる要素が秘められている。
- ⑨ 孝悌図のような文字絵には、複数の違うモチーフが生まれ、字形を象っているものがある。しかし『篆隸文体』の象形書は、同一のモチーフを複数の多様な形で仕立てることで、字形を表している。
- ⑩ 一定の書体の書き方に基づいて字形を作らず、他の書体の書き方を導入して、象形書を表す場合がある。例えば虎書の「長」である。上半部を象った虎の姿は楷書の字形を象ったものであるが、下半部を象った虎の尻尾は草書の字形を象っている。

雑体書の造形的な特色は、文字を構成する画や形態素変え、或いは図柄を用いて、新たな文字造形（記号性向と絵画性向の雑体書）を試みていることである。これは確かな漢字の字形に基づいて、字形における視覚的な密度を変えたり、多様の用筆を用いることや図柄を字形の構成要素として活かすなどのことで、文字の造形性を高めることに寄与している。

そしてこの記号性向の雑体書と絵画性向の雑体書とは、相互に補完的な関係にあると思われる。記号が持つ線や面の造形性と絵画が持つイメージの造形性とが『篆隸文体』の雑体書の本質をなすものと思われる。このような雑体書の造形的な特色は、記号性と絵画性との関りについての思考を深めるだけでなく、今日の文字デザインの分野においても有益な示唆を与えてくれると思われる。

おわりに

「雑体書」は文字造形におけるさまざまな試みや、造形意識といったものが、書体として様式化されたものと見なすことが出来る。

「雑体書」の製作に関わった人が一部の貴族階級であったか否か、或いはその書体がどれほどの期間用いられていたのかどうか、という問いも重要であるが、それ以上に「雑体書」というものが、用度に即して制作され、その書体が公的な社会の視覚媒体として認められていたということは、一層、重要であると思われる。とりわけ『篆隸文体』の記事に、籀書が学童を教える教科書を書いた書体であること、小篆書が碑文を刻む書体であること、刻符書が印を刻む書体であることが記されていることは、改めて注目すべきであろう。

本論では、『篆隸文体』の雑体書と他の文献の雑体書との比較は行うことが出来なかった。ただ、ここで一言言っておきたいことは、他の文献の「雑体書」と比べて、『篆隸文体』の「雑体書」は極めて装飾的であるということである。その点で『篆隸文体』は漢字意匠を考え

る際、非常に注目に値する。『篆隸文体』が作られた六朝という時代は、あらゆる造形の領域において華麗さという特色を持っていたと言えよう²¹⁾。そのような当時の時代性や造形性というものが、『篆隸文体』の雑体書を装飾的なものに作り上げたのだと思う。『篆隸文体』の雑体書の装飾性は、文字の本来の機能、即ち情報伝達機能を果たす形に付け加える飾りのもではない。それは文字についての信頼や尊厳を表した形であり、それを除いては「雑体書」は成り立たないと思われる。

以上の考察から、『篆隸文体』の雑体書は、三つの特色を有していることが明らかになった。その第一の特色は、雑体書そのものの分析から明らかになった「記号的性向」と「絵画的性向」からなる造形的なものである。第二の特色は「用途の書」としての「用途性」というべきものである。そして第三の特色は、他の雑体書と比較からいえる「装飾性」である。

注

- 1) 拙稿：「漢字を基盤とした文字意匠の一考察」（京都工芸繊維大学，修士論文，1983）。「朝鮮造形文字の形象化」（産業情報大学論文集所収，1999）。「葦手概論」（韓国デザイン学会誌，2001）。
- 2) 佐野みどり「文字と絵と」（『日本の美学』30号 ぺりかん社，2000/3）。
- 3) 東晋の書家。字は逸少。楷書・草書において古今に冠絶，その子の王献之と共に二王と呼ばれる。「蘭亭序」「楽毅論」「十七帖」などの作がある。（307?～365?）
- 4) 字は信本。書は初め王羲之から学び，のち險勁な書風を完成した。楷書の極則とされ，貴族たちに書を教えた。その尺牘は当時模範とされ，高麗から使者を遣わしてその書を求めたという。（557～641）
『中国書論大系・二』二玄社，1978，283頁]
- 5) この書物は，「初めに書を学ぶ者への戒め」を説き，次いで『説文解字』その他「書字を録する者」を述べて批判検討している。とくにこの書の末には齊・梁時代に関する書体名を列挙するなど，「雑体書」の様相を述べている。
- 6) 梁披云『中国書道大辞典』1984，35頁
- 7) 上掲書，同頁。
- 8) 齊の宗室のなかでも重んぜられ人物で，その声誉は南朝王族第一と稱せらる。武帝が帝位につくと，もと楚の地である竟陵（湖北省千門懸の西北）の王に封ぜられる。そこで当時の有名な文人と深く交際し「竟陵八友」という名を後世に残す。また學士を集め，五經（易經・書經・詩經・礼記・春秋）や百家のことを抄して四部要略千卷を作る，一方では僧を招い仏經を講読するなど，私事にも深く関わっていた。『中国人名大辞典』1642頁]
- 9) 中国古伝説上の三皇の一。人首蛇身で，燧人氏に代って帝王となり，初めて八卦・書契・網罟・琴瑟り，庖厨を教え，婚姻の制を設けたと伝える。
- 10) 「蒼頡」とも書く。黄帝の臣で，鳥の足跡をみて初めて文字を作ったといわれる人。

- 11) 空海作の詩賦・表文・碑銘などを弟子の真済が編集した書。10巻。そのうち8・9・10の3巻は散逸したが、済暹によって「補闕抄」として補われた。
- 12) 駒井鷲静『空海の書論と作品』雄山閣出版株式会社, 1984, 260頁。目加田明子『中国書論大系・二』二玄社, 1978, 280頁。なお筆者がテキストとする『篆隸文体』は古典保存会が昭和10年(1935)5月20日, 非賣品で発行, 配布したものである。
- 13) 周易で, 陰陽の爻こうを組み合わせた八つの形象。自然界・人事界百般の現象を象徴する。
- 14) 意味を持つ最小の言語単位。
- 15) 書法で, 起筆に毛筆の穂先があらわれるように書くこと。
- 16) 筆鋒を平いにした状態(筆鋒が刷毛のような形)に近くなって運筆することをいう。
- 17) 中国古代伝説上の帝王。三皇五帝の一。姓は姫, 号は軒轅氏。炎帝を破り, 蚩尤を倒して天下を統一, 養蚕・舟車・文字・音律・医学・算数などを制定したという。陝西省の黄陵に祭られ, 炎帝とともに漢民族の始祖として尊ばれる。
- 18) 中国古伝説上の五帝(黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜)のなかの一人。(前2507)
- 19) 周王朝の基礎を作った王で, 姓は姫, 名は昌である。周王朝の祖の武王の父で, 殷に仕えて西伯と称される。その人物・政治は儒家の模範とされる。
- 20) 身より尻尾が長い白い虎で, 黒い文をした西方浄土の獣だという。生草を食わず, 自殺したものの肉を食う。
- 21) 中田勇次朗『中国書論集』二玄社, 1984, 25頁, 及びペトリシャーバクリエブリ『ケンブリッジ中国史』時空社, 1994参照。